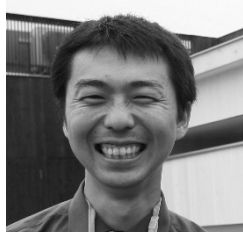


第24回 JIA 東北建築学生賞 開催と審査経過について

◎公益社団法人 日本建築家協会東北支部

事業委員長 櫻井 一弥



JIA 東北建築学生賞は、今回24回目を迎えました。ここまでの長期間にわたって続けてこられたことは、ひとえに多くの皆様からのご支援の賜物と、篤く感謝申し上げます。東北地方において建築を学ぶ学生さんや教育機関にとって、本賞が建築界への登竜門となってきたことを改めて感じている次第です。

公開審査会は、2020年10月23日（金）に、せんだいメディアテーク1階 オープンスクエアで行われました。10校（9大学 1高専）12学科から32作品が応募され、白熱した議論を経て各受賞者が決定しました。

今回は、コロナ禍における審査ということで、実施の方法については執行部でかなり検討を重ねて参りました。結果として、制作者である学生さんを会場に集めて行う例年の形式は、新型コロナウイルス感染症対策の観点から望ましくないとの結論に至り、学生さんには、遠隔会議ツールである「zoom」を使ってリモートで参加いただくこととしました。審査員は全員会場に参集し、提出された32作品のパネルを会場に並べて各作品を確認しながら審査を行いました。各作品の画像をzoom上で画面共有しながら会場でもスクリーンに映し、一作品ずつプレゼンテーションと質疑を行い、十分な作品の読み込みができたと感じています。機器上のトラブルもほとんどなく、予想以上にスムーズな運営ができました。

今回も、事業協賛金のご協力を各方面にお願いいたしましたところ、本賞の趣旨に賛同くださった多くの皆様から協賛金が寄せられました。厚く御礼申し上げます。また今回は、日本建築学会東北支部デザイン教育部会との共催という形で進めることができたことも、喜ばしいことであったと考えております。

最後になりましたが、受賞された皆さん、誠におめでとうございます。また、zoomを使った初めての開催にもかかわらず、積極的にご支援くださいました各学校関係者の皆様、および開催にあたって準備を下された全ての関係者の皆様に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

来年度以降も、東北地方にとって重要なものとなりつつある、JIA 東北建築学生賞の継続的な運営に向けて、関係者一同努力して参りたいと考えております。ご支援・ご指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

<共催> 一般社団法人 日本建築学会東北支部建築デザイン教育部会
<後援> 東奥日報社、秋田魁新報社、岩手日報社、河北新報社、NHK仙台放送局、TBC東北放送、仙台放送、KHB東日本放送、ミヤギテレビ、山形新聞・山形放送、福島民報社、福島民友新聞社、東北専門新聞連盟、一般財団法人 みやぎ建設総合センター、一般社団法人 公共建築協会東北地区事務局、一般社団法人 日本建築学会東北支部

■入賞者・作品（敬称略）

第24回JIA東北建築学生賞 入賞作品一覧

賞	No	作品名	学校名	氏名	学年
最優秀賞	27	まちの縁台に腰かけて	日本大学 工学部 建築学科	和久井 亘	4
優秀賞	07	Connection ～人や自然を繋げる学校～	山形大学 工学部 建築・デザイン学科	安部 豪人	3
				山中 美紀	3
				吉澤 航平	3
優秀賞	08	渾然一体 -重なる歴史と路-	東北芸術工科大学 デザイン工学部 建築・環境デザイン学科	大室 新	4
奨励賞 みやぎ建設 総合セクター賞	10	集合住宅革命	東北芸術工科大学 デザイン工学部 建築・環境デザイン学科	三富 俊	3
奨励賞 東北専門新聞 連盟賞	31	ルアンタイにちなむ コワーケーションから広がる縁	仙台高等専門学校 建築デザイン学科	遠藤 天夢	5
奨励賞 東北専門新聞 連盟賞	14	竪穴式コミュニティ	仙台高等専門学校 総合学科 建築デザインコース	鈴木 香澄	4
奨励賞 河北新報社賞	03	渦の杜ホール	東北学院大学 工学部 環境建設工学科	小野寺 圭史	4
				高橋 和真	4
特別賞	32	玲瓏の常夜灯	東北大学 工学部 建築・社会環境工学科	川端 知佳	4
特別賞	05	GAP VILLAGE	東北工業大学 ライフデザイン学部 生活デザイン学科	吉田 陽菜 子	3
特別賞	21	錦町浮遊計画	東北大学 工学部 建築・社会環境工学科	石原 拓実	4

第 24 回 J I A 東北建築学生賞 審査結果

※数字は得票数

作品 番号	1次投票	8と10で挙手		最優秀・優秀賞 投票	奨励賞 投票	特別賞 審査	賞
		1回目	2回目				
1							
2	1						
3	③				2		奨励賞 河北新報社賞
4						2	
5	1					⑦	特別賞
6	1					3	
7	⑥			3		6	優秀賞
8	④	5	⑥	1		5	優秀賞
9	2						
10	④	5	4			2	奨励賞 みやぎ建設総合センター賞
11	1						
12	1					4	
13	2					4	
14	③				3		奨励賞 東北専門新聞連盟賞
15							
16	2					5	
17							
18						1	
19						4	
20	1						
21	1					⑥	特別賞
22	2						
23	2					4	
24	2						
25						3	
26							
27	⑥			6			最優秀賞
28							
29						5	
30						2	
31	③				4		奨励賞 東北専門新聞連盟賞
32	2					⑫	特別賞
選出 作品	7					3	

※○は選出作品

※○は選出作品

※○は選出作品

第24回 JIA 東北建築学生賞 応募作品毎講評

◆応募作品講評 (前原 尚貴) No. 01~06

賞	No	作品名	学校名	氏名 (敬称略)	学年
	01	アートを日常に 日常をアートに	山形大学 工学部 建築・デザイン学科	中西 由佳	4
<p>山形県県民会館跡地に、美術館と博物館を合築し、まちに開かれたミュージアムを計画する課題主旨である。計画地は市中心部の商店街・官庁街の角地に位置し、近年店舗のリノベーションが盛んなエリアでもある。提案者は、「アートを日常に 日常をアートに」を骨子に一見親しみにくい美術館や博物館をもっと身近に感じられるように積極的な提案をしている。建物は周辺環境を上手く読み込み、凹凸のある平面と様々なボリュームの立体で構成され、内外に町の日常から生み出される芸術や自然を展示し、まちを探索するようにアートとふれあえることを意図している。これらの体験を通して、多くの人がまちの魅力や日常的な芸術に気づき、より活気のある豊かなまちになって欲しいとの願いが込められた。まちを新陳代謝させ、ひとを鼓舞するような豊かな提案である。</p>					
	02	アメノヒニユク	仙台高等専門学校 建築デザイン学科	竹中 里来	5
<p>名取市西側の丘陵地/平地の地形的境界部に地域資源を関連させ、自然/都市の境界、様々な施設や機関の境界をつなぐものとして「際（エッジ）に立つメディアセンター」を構想する課題主旨である。提案者は、全ての生物の源である水に着目し浄水場をモチーフとした。水の変化をメディアとして扱い、浄水場への理解を促すための、プロローグとしている。雨水の浄化を心の浄化にたとえ五感で感じたり、雨に日にだけ現れる道をつくり、雨を楽しめる仕掛けとしたり、雨風から身を守る建築を生き物のようなもっと身近な存在としている。その他、雨音の音楽や水中生物の口から出る気泡、雨影、水鏡など水にまつわる様々なイメージが描かれ、浄水場の水が町全体に行き渡り水で町はひとつになると結ばれている。水を連想させる水彩画のような淡いタッチの絵の中に水のやさしさや怖さが描かれ、雨の文化を楽しみ、雨に日に行きたくなるような詩的な世界が提案されている。</p>					
奨励賞 河北新報社賞	03	渦の杜ホール	東北学院大学 工学部 環境建設工学科	小野寺 圭史 高橋 和真	4 4
<p>仙台駅前という都市の中心部に周辺環境を考慮した、大規模複合施設を設計する課題主旨である。そこで、楽都仙台にちなみ音楽で町を盛り上げるような駅前広場と音楽関連の複合建築を提案している。色々な方向から人々を誘い込む渦巻のような分棟型の建物が、程よい隙間と余白を周囲にもたらしめている。各建物は、高低差のあるブリッジでつながれ、立体広場と迷路性のある公園のような楽しさが生み出されている。スケッチと模型でこのような都市部のスケールを考慮し、動線のイメージがそのまま視覚化され、上昇する竜巻のような動きのある形が野心的に提案されている。一方駅前のビルに挟まれ、雑踏にこだまする外部環境や屋上緑化によるパッシブデザインなどについて、もう少し踏み込んだ提案があればさらに説得力のある優れた案になったと思う。</p>					

	04	開閉がもたらす にぎわい	東北工業大学 工学部 建築学科	木村 華	3
<p>大学キャンパス内に国際交流・地域交流の場所を設計し、身近な場所の可能性を発見する課題 主旨である。提案者は、学生寮とギャラリー、カフェなどからなる、課題発表と作品展示の場 をつくり、留学生や地域交流の拠点にしたいと考えた。緩やかにカーブする道に面するように、 分棟型の各用途の平面が点で接し角度を変えて連なり、一つの大屋根で統合されている。キャン パス内の他の建物と形の差別化を図りつつ、建物がくの字に折れ曲がり、開いたり閉じたり することで生まれた三角形のテラスが木陰のような、人と人をつなぐ溜まり場をつくり出し ている。</p> <p>場所性を上手く読み込み、移動と共にスペースが見え隠れする動きのある建築が、スケッチと パースで分かり易く魅力的に表現されている。さらに、建物間を通り抜けて周辺地域とキャン パス内をつないだり、傾斜した屋根上スペースの活用など、奥行きや境界をもっと曖昧にし、 境界を越えて派生するような、にぎわいの感じられる提案があれば尚良かったと思う。</p>					
特別賞	05	GAP VILLAGE	東北工業大学 ライフデザイン学部 生活デザイン学科	吉田 陽菜子	3
<p>大学キャンパス内に、各自で想定したプログラムを構想し、地域コミュニティに開かれた「み んなの家」を提案するという課題主旨である。提案者はSNSの普及により、人とのつながり が希薄になることへの危機感から、昔がそうであったように人とのつながりを持てる集落のよ うなセミナーハウスを提案している。人が行き来できるよう建物に隙間を空け、畑や読書など イベントやコミュニケーションをとれる共有空間をつくり、風通しもよさそうで、井戸端会議 にも花が咲きそうな地域交流の場をつくり出している。こうした積極的な提案が分かり易いダ イヤグラムと細部まで作り込まれた模型により、具現化されている。今後、コロナ禍でますま す希薄になりがちな、人とのつながりをヒューマンなスケールで描いた説得力のある提案であ る。</p>					
	06	ギャラリー コリドール ～市民の創作ステーション～	東北文化学園大学 科学技術学部 建築環境学科	齋藤 華帆	3
<p>道の駅が課題主旨であるが、「地域振興の道のりの場となる拠点」を、地域の問題を探りなが ら提案するというものである。提案者は、一般的な道の駅の用途に、地域の芸術・文化に寄与 することができ、もっと気軽にこれらに触れ合える場として、県民がつくる創作ギャラリーを 提案している。県内の工芸品を中心に、池のある中庭に沿ったギャラリーで積極的にこれらを 体験し、興味を持ち広く知ってもらえるような展示空間としているが、劇団や映像作家など工 芸以外の県民芸術家のための「プチ美術館」という要素も併せ持っているユニークな道の駅で ある。欲を言えば、建築の素材にも地元でとれる自然素材や工芸品などを使い、ファサードや 建築自体が地域性を感じられる提案やギャラリーで囲まれた中庭を閉じることなく、もっと積 極的に外部に開く提案があれば、より市民の創作ステーションとしての魅力が伝わったのでな いかと思う。</p>					

第24回 JIA 東北建築学生賞 応募作品毎講評

◆応募作品講評 (亀田 進之助) No. 07~12

賞	No	作品名	学校名	氏名 (敬称略)	学年
優秀賞	07	Connection ~人や自然を繋げる学校~	山形大学 工学部 建築・デザイン学科	安部 豪人	3
				山中 美紀	3
				吉澤 航平	3
<p>30年後を見据えた新しい学校という難しい課題に対して作者は自然に包まれた環境を提案しています。通り道をはじめ中庭や屋上庭園が計画され、行ってみたい学校になっており、審査員からの高評価を得ました。まずコンセプトがしっかりしていますし、ダイアグラムも明快で好印象です。プランは曲線で構成され上手に全体をまとめていて感心しました。表現も3D パースだけでなく手書きのスケッチも混ぜておりバランスの取れた提案書になっています。ただ、グラウンドとの分断がやや大きく感じられました。ピロティ部分のイベント時のイメージパースがあると良かった。また、実体験ならではの学習プログラムを今回の課題で終わらず継続して考え続けてほしいと思います。</p>					
優秀賞	08	渾然一体 -重なる歴史と路-	東北芸術工科大学 デザイン工学部 建築・環境デザイン学科	大室 新	4
<p>地方都市の空洞化を解決する課題に対し、かつて栄えた工場の風景の再生を目指した意欲的な提案です。真っ先に木材工場と商業施設の複合という斬新なプログラムが印象に残りました。商業施設の一部を1階にも配置するなど、立体的に計画すればお互いにメリットが生まれそうだが、そこまで踏み込めていなかった点が悔やまれます。また木材の製作ワークショップなどを発展させるとより面白い提案になると思います。プログラムの詰めが甘い部分はありますが、最も若々しい提案で好感が持てました。実際に建設されたら是非体験したい空間として表現されていますし、作者の想いが込められたタッチで表現されたパースは今回の応募作品の中で最も惹きつけられました。</p>					
	09	四季を感じる集いの場	東北工業大学 ライフデザイン学部 生活デザイン学科	志田 遼也	3
<p>地域コミュニティの創出を図るという拠点施設の課題に対し、四季を感じられる建築を提案しています。コンセプトは明確に導けていますし、とても交流しやすい平面になっていて、プランも細やかに考えられています。ただ、四季の使い方に対してどこか想像しにくいと感じました。全体イメージは表現されていますが、どんなイベントを想定しているか具体的な説明がなかったのが悔やまれます。せめて、アイレベルからのパースがあれば分かりやすくなると思います。一方、中庭の通り抜け道が提案のサブコンセプトでもありますが、その特徴が弱い印象を受けました。通り抜けのスペースの様子を描いたパースが加われば、より空間の特徴が伝わったはずです。</p>					

奨励賞 みやぎ 建設総合 センター賞	10	集合住宅革命	東北芸術工科大学 デザイン工学部 建築・環境デザイン学科	三富 俊	3
<p>とても面白いアイデアです。最初は提案の内容を把握するのに時間がかかりましたが、自身の生活における不便さを解消したいという問題意識が明確で高評価です。入念なリサーチに基づいており社会性のある提案になっていますが、図面が少ないため活動のスケール感が伝わってこないのが残念です。配置図だけでなく平面図があれば、さらに評価されたと感じます。また、フレームだけでなくテントや膜がかかっていると雑多な市場的な雰囲気も生まれ、賑やかになると感じました。十分にクリエイティブな街づくりに発展しうる可能性のある提案ですので、今回の課題で終わらず継続して取り組んでほしいと思います。</p>					
	11	商店街に建つ図書館	宮城大学 事業構想学群 価値創造学類	木村 友哉	4
<p>商店街にある図書館という難しい課題に対して、滞在と立寄という相反した機能を混在させた意欲的な提案です。高さを変化させ視線をコントロールする考えはとても良いのですが、1階と2階の分断がとても大きく感じられました。確かに1階と2階で分断を図った意図は理解できますが、高さの変化というアイデアをコンセプトにして発展させると完成度の高い提案になると思います。例えば、中2階を設けたり小さな吹き抜けを設計したりと考えられることはたくさんあります。また、断面パースは完成度が高いのですが、どうも印象に残らなかったのが悔やまれます。文字による説明を付け加えると分かりやすくなったと思います。</p>					
	12	「知る」×「識る」 NAKANIIDA CIVIC DESIGN CENTER	宮城大学 事業構想学群 価値創造学類	久米田優紀菜	3
<p>新しい地域住民のための拠点施設というリアリティのある課題に対して、音とのつながりを手掛かりにしたアイデアはシンプルかつ明快です。コンセプトの導き方は的確でかつ祭事や工芸など地域の歴史への考慮も行き届いていて好感が持てました。しかしながら、音のつながりがプランに十分に反映されていない印象を受けました。確かに音に関するスペースは用意されてはいるのですが、音のスペースを介して他居室と連携させるとプラン構成も説得力を増すと思います。また、曲面の壁が特徴的な外観で造形センスが感じられました。カーブによって生まれるスペースの使われ方のイメージがあればより提案の良さが伝わったと思います。</p>					

第24回 JIA 東北建築学生賞 応募作品毎講評

◆応募作品講評 (加藤 一成) No. 13~17

賞	No	作品名	学校名	氏名 (敬称略)	学年
	13	ターミナルの再生	東北大学 工学部 建築・社会環境工学科	石川 裕貴 鶴岡 稜悟 浜崎 美晴	3 3 3
<p>「杜の都のすまい・そのフリンジを覚醒する」というテーマの下、公共性をもった複合的住環境のモデルを、都市設計及び建築設計の2段階の視点からアプローチすることによって探求していく課題である。提案者は、仙台市のフリンジのなかで、自然と快適性を共存させた環境を提供し、幅広い年齢層の人々が交流できる空間を提案している。多用途の建築群によるコンプレックスが形成されており、多様で立体的な景観が表現されている。建築と外部空間のバランスもよく考えられている。マスタープランではエリア分けから人の流れまで、具体的かつ周到にプランニングされていることが理解できる。パネル全体の中に数多くの建築が配置されている故、個々の建築の良さも見てみたいと思わせる。</p>					
奨励賞 東北専門 新聞連盟賞	14	竪穴式コミュニティ	仙台高等専門学校 総合学科 建築デザインコース	鈴木 香澄	4
<p>このような時代に敢えて Public, Activity, Process, の3つのポイントから100人が集まれる場所を計画する課題である。提案者は、若者の地域とのかかわり方を見直し、地域コミュニティの将来像を発信する建築を提案している。コミュニケーションの希薄化を一旦疑い、さらにネガティブをポジティブに変える仕掛けが竪穴式コミュニティの将来像として示されている。遠見塚に関連させた竪穴式に着目した建築群が大変ユニークかつシンボリックに表現され、今までに無い新しい景観の創出を想像させる。また成長の過程に従い、見られるもの・見えるもの・見せるものが変化する様が独特の柔らかなタッチで描かれる。若い感性と表現力による、奨励賞に相応しい作品だと感じた。</p>					
	15	繋がりの枝 ～ラーニング・commons 新棟～	宮城学院女子大学 生活科学部 生活文化デザイン学科	吉田 瑠菜	3
<p>地域社会との協働や活動が内外に表出し、利用者同士が刺激し合ってこれまで以上に学習意欲が増すような場所としてラーニング・commonsを設計する課題である。提案者は学内・外の人でも互いに意識しあい、切磋琢磨できるような壁を作らない繋がりのある空間を提案している。水平・垂直にそれぞれの空間が繋がる仕掛けが設えられ、不整形な形状にも意味が与えられている。緑豊かな敷地に、様々な形状の用途が立体的かつプロムナード状に配置され、空間体験をしてみたいと思わせる魅力的な空間が演出されている。断面図はまだ学生的表現から脱していないように感じる。縦方向の繋がりが重要な建築でもあるので、今後現実的な建築への理解を深めていく事を期待する。</p>					

	16	紡ぐ学び舎	日本大学 工学部 建築学科	川上 陸	4
<p>便利な仮想空間とは異なる動線とアクティビティが複合的に重なり、空間の楽しさが相互に染み出すプラットフォームのような空間をつくることを目標とする課題である。提案者は新潟県燕市をケーススタディーとして、伝統工芸や特産物の「担い手不足の解消」と「地域の学びと賑わい創出」を目指す、多様な体験が出来る集落型の建築を提案している。まず重なり合う屋根と複雑に入り組んだ木造の軸組で表現される模型写真に惹きつけられる。設計主旨・提案・年間行事等が丁寧に並べられ、具体的でわかりやすい表現となっている。半屋外の広場空間を中心とし、機能ごとに分棟配置された構成も魅力的である。広場空間のパース等も美しく、完成度の高いよくまとまった作品だと感じた。</p>					
	17	Designer's Village	東北工業大学 ライフデザイン学部 生活デザイン学科	伊藤 将太郎	3
<p>生活に係る空間から資源や課題の発見・探求から活用提案、具体的な「場の創出」をすることを目標とする課題である。提案者はデザインを学ぶ学生たちのシェア・自然とシェア、デザイナーと自然の調和の表現をテーマに、交流・開放・自然 3つのエレメントからシェア空間の提案を行っている。自然の中で外に開かれた開放的で風通しの良さそうな建築が描かれており、気持ちの良さが十分に伝わる表現となっている。環境に対する配慮がなされているのは良いが、具体的に可動するであろうシステムがやや分かり難かった。若干不便も感じられるプランであるが、独自のコミュニケーションを促進するための非日常の空間として、魅力のあるものとなっている。</p>					

第24回 JIA 東北建築学生賞 応募作品毎講評

◆応募作品講評 (佐々木 則章) No. 18~22

賞	No	作品名	学校名	氏名(敬称略)	学年
	18	寺町に浮かぶ長屋	宮城学院女子大学 生活科学部 生活文化デザイン学科	吉田 瑠菜 森谷 陽南子 田村 咲樹	2 2 2
<p>L字型の敷地に、オーナー住居、3世帯分の賃貸住宅、学習塾を計画しています。この敷地にこれだけの要素を盛り込むには、相当なスタディを重ねたことがうかがえます。また、高密度な周辺環境の中で、これだけ高密度な建築を計画するにあたり、開放感をコンセプトに掲げた意欲も評価出来ます。ただ、コンセプトを実現する為には、一つの考え方や固定概念にとらわれず、柔軟な発想をもってさらにスタディを繰り返す必要があったと感じます。模型写真の通り、各場面での想定や計画は出来ていると思いますので、それを反映しながら全体をまとめていく意識をもつと計画に説得力が増してくると思います。また、建築の色彩は、立体造形をふまえて検討すると良いと思います。</p>					
	19	通り道	日本大学 工学部 建築学科	山口 和紀	3
<p>2つの公園に隣接した敷地に建築ミュージアムを計画する課題です。2つの公園へのアプローチとしての機能を意識して計画しています。公園への動線を敷地内で整理し、それに沿って展示空間を配置し、敷地全体を1つの公園と見立てて検討を進めている部分に好感が持てます。住民に日常的に鑑賞や学習をしてほしいという意欲は評価出来ますが、それを具体化する計画がプレゼンテーション内で視覚的に示されると、さらに作品の意図が伝わったと思います。施設となる建築をまとめようとする意識が強く感じられます。コンセプトである、通り道に徹底して多様な考え方を展開し、内外部に渡って展示や中庭空間が計画出来れば、より魅力的な施設になるのではないかと思います。</p>					
	20	とけ込む	宮城学院女子大学 生活科学部 生活文化デザイン学科	吉野 瞳	3
<p>周囲の自然にとけ込む建築を意識して計画しています。アーチ状に連なる屋根は、周辺環境とゆるやかにつながり、自然との一体感が感じられます。ダイナミックな立面に仕上がり、すばらしい造形力だと思います。屋根曲面の重なり具合によって適度にコントロールされた光が差し込む内部空間は、気持ちがい空間が想像出来ます。空間をなるべく壁で区切らず、レベル差によって一体空間の中で柔らかく区切るという手法は評価出来ますが、レベル差の付け方にもう少し工夫があれば静と動の空間にメリハリが演出できたと感じます。曲線の屋根に対して直線で不整形な平面については、もう少し相互の関係性を補足すると、より伝わるプレゼンテーションになったと思います。</p>					

特別賞	21	錦町浮遊計画	東北大学 工学部 建築・社会環境工学科	石原 拓実	4
<p>ある映画のシーンから連想したイメージをヴォイド、スリット、レイヤーという3つの建築的要素へ変換し、さらにこの要素をもとに建築を構築していくプロセスが秀逸な作品だと思います。公園を縦方向へ展開し、空中公園にするという独創性も評価出来ます。雰囲気のある魅力的な建築が出来ていると思います。作品の特徴や世界観を表現したパースや色彩の使い方、パネル内のレイアウトも見やすく、好感がもてます。パネル下部にレイアウトされた内部・断面パースが示す内容に対する補足説明、建築を構成するカフェ、オフィス、彫刻ギャラリーへの説明がプレゼンテーション内に補足されると、各審査員の作品への理解度が高まり、評価が変わったのではないかと感じます。</p>					
	22	箱と町	東北芸術工科大学 デザイン工学部 建築・環境デザイン学科	鈴木 雄大	3
<p>コロナ時代のコミュニティの在り方として平面的なコミュニティの場だけではなく、断面的なコミュニティづくりに着想している部分が評価出来ます。箱のボリューム同士の重なり、ずれにより生まれる空間とそのつながり方、構成と造形力が素晴らしいと思います。各住戸の日照格差を解消すべく、各戸のレベルを変えている部分、庇と袖壁による日射遮蔽、取得の検討している部分も評価出来ます。手書きとPCを併用したプレゼンテーションも好感が持てます。エコハウスを求めた課題である為、エコに対する検討や検証、住宅としての構成や工夫の説明が少ない印象を受けます。検討の結果、採用しなかったエコ項目についても補足しておくプロセスが伝わって良かったのではないかと思います。</p>					

第24回 JIA 東北建築学生賞 応募作品毎講評

◆応募作品講評 (齊藤 彰) No. 23~27

賞	No	作品名	学校名	氏名 (敬称略)	学年
	23	花～思い出のまち	山形大学 工学部 建築・デザイン学科	伊藤 音々	4
<p>古き花街の路地に接する敷地を地域再生の核として整備する提案。路地の持つ線的な奥行をポケットパークを設け面的に広げており、路地の奥に更に引き込まれる奥があり、その先に開けた大通りがあるという構成は魅力的になる可能性を感じた。床の重なりを奥へ進んだ先を行き止まりとせず路地を立体的にも拡張できていたら更に魅力的な提案になったようにも感じる。ポケットパークに面した建物の境界のつくり方で変容性のある空間を生み出そうという試みも評価できるが、ポケットパークや路地に面した部分にトイレがくるなどちぐはぐな印象も否めない。「花」というキーワードは設計のきっかけとしては良いが、全体を統合するコンセプトとするにはもう一步踏み込んだ考察が必要なように思う。</p>					
	24	ひきこむ、からまる、 ちらばす ～体育館を 中心につながる小学校 の提案～	東北工業大学 工学部 建築学科	岩見 夏希	3
<p>アリーナを中心に三面を校舎が、一面をアプローチとなるグラウンドが取り囲む形式の小学校の提案。この形式の配置ではアリーナの周囲を廊下として学校内の主動線とする事が多いが、本提案ではアリーナの周囲を廊下ではなく階段状の中間領域とし、主動線を全てアリーナ内部としている点が特徴的でありアクティビティをアリーナに集中させたいという強い意志を感じた。対象敷地の読み解きで語られているパブリックとプライベートについて、「玄関口」と「機能」という抽象的な意味づけのみでなく、地域における役割や地域住民を交えた利用シーン、それを実現する敷地境界のつくり方など、この場所に計画するからこそ生じる課題について具体的に検討できていれば説得力が生じたと思う。</p>					
	25	本棚と歩く	東北工業大学 工学部 建築学科	鎌田 勝太	3
<p>前面道路の勾配なりにスキップフロアとして、散歩の延長のように巡ることができる図書館の提案。行き止まりのない動線によって巡る体験を生み出している点、前面道路に面して内部の活動を表出させることに対して意識的な点に展開の可能性を感じた。他方、折り返しスロープ部分が単なる通過動線になっている点、壁面本棚の裏側に閲覧などの機能を押しやっっている点が体験を単調にしている様に感じた。スロープが移動のみの空間として大きな面積を費やしてしまっているため歩行空間はスロープに拘らず、例えば吹抜と絡めて空間の一体感を強化する、展示スペース同様に多様な機能を持った床をシークエンスに沿って組み立てる、前面道路と動線を絡める、などの方向もあったように思う。</p>					

	26	まちなかアトリエ	宮城大学 事業構想学群 価値創造学類	相原 英未利	4
<p>既存建物のリノベーション提案。ある種のいかがわしさを持った同好者の秘密基地感など、対象地の雰囲気と現代のニーズをうまくとらえたプログラムの選択となっている。様々なジャンルのこういう施設が街中に点在していたら街はもっと面白くなるのではという一つの可能性を感じた。吹抜が空間上のポイントとなっているが上階では吹抜の先が壁になっており機能間を繋げているようには感じられず、更に地下だけが仲間外れになっている様にも感じた。単なる機能集約型貸しスタジオとの違いについて、専有と共有、サードプレイス、私的な公共やコミュニティなどに関する考察を深めた上で、建築的操作と外部への発信の関係などについてもう少し踏み込んで提案できていたらより良かったと思う。</p>					
最優秀賞	27	まちの縁台に腰かけて	日本大学 工学部 建築学科	和久井 亘	4
<p>空き家を改修し取り込みながら公園同士を繋いだ面的ランドスケープにより新しい時代の都市環境を形成しようとする提案。改修する建物の選択も要点を押さえていて、失われた谷の痕跡を今後の社会に求められるプログラムを持った新たな公園として巧みに位置付け直している。浄水場側は谷の痕跡を見つけにくくなるにつれて強引さが際立ってしまうが、公園同士を繋げているようでありながら谷によって分断されている住宅地同士をも結び付け直しているようにも見え、強引さを差し引いても更なる展開も見込める意欲的な提案である。建物以外の部分にフットパス以外の機能が無いように見える点は残念だがフットパスの形態や意味などについても具体的に説明できるとより説得力を増したように思う。</p>					

第24回 JIA 東北建築学生賞 応募作品毎講評

◆応募作品講評 (布施 剛臣) No. 28～32

賞	No	作品名	学校名	氏名 (敬称略)	学年
	28	道の駅 泉ヶ岳 ～皆で創る 環境ステーション～	東北文化学園大学 科学技術学部 建築環境学科	柿崎 可奈子	3
<p>仙台市泉区の北西部にある泉ヶ岳を望む敷地を対象とし、道の駅に代表されるような施設で地域振興をいかに促していくかを考える課題です。</p> <p>泉ヶ岳を望む敷地に建つ施設が風景の一部となるように計画し、施設を通してそこを訪れる人々に「楽しい行楽」と「自然への学び」をもたらすという提案です。</p> <p>施設を風景となじませるため、分棟型として各機能の配置をしっかりと分析してプランをまとめ上げられていました。屋根の緑化や建物ごとにかたちを変えたファサードデザインも印象的でした。</p> <p>ただ、この施設は観光客や地域住民が集まる道の駅であることから、道路側から人々を呼び込むためのファサードデザインの意図や道路側からのアプローチに対する提案があればさらに良かったと感じました。</p>					
	29	道の駅 伊達の杜三日月	東北文化学園大学 科学技術学部 建築環境学科	瀬戸 愛音	3
<p>宮城県内を敷地の対象とし、道の駅に代表されるような施設で地域振興をいかに促していくかを考える課題です。</p> <p>県内外から訪れる人々に対して、宮城県の歴史や食文化に触れてもらえる施設計画を通して宮城県の良さを再認識してもらえる道の駅を目指した提案です。また、大人も子供も楽しめるような各種ゾーン(屋内遊技場・キャンプ場・釣り堀)を計画に取り込んでいることも特徴の1つです。</p> <p>水辺空間を敷地の中心に設け、これらを活かしながら建物を分棟にして渡り廊下でつなぐ計画が魅力的でした。</p> <p>ただ、宮城の歴史や食文化がテーマであることから、各機能の配置につながりをもたせた平面計画や外観に関する地域性を分析したデザインがあればさらに良かったと感じました。</p>					
	30	緑の箱庭 都市に建つ立体農園	東北学院大学 工学部 環境建設工学科	須藤 晴樹	4
<p>課題は、市街地に住人 5 世帯が住む住宅と店舗が一体となった店舗併設住宅を通して都市型の新しい住まい方を計画する内容です。</p> <p>提案では農業に着目し、都市部に住んでいる人々が農業に触れたり気軽に体験できるような栽培スペース・販売スペース・イートスペースを設けた併設住宅を計画しています。</p> <p>住戸・農業体験スペースと抜けのあるオープンスペースや畑を立体的に上手に組み上げながらつながりをもたせている計画に、食を通した楽しい住まいのあり方を感じました。</p> <p>それだけに、提案する農業のメインとなる畑の栽培に対する環境面の配慮についてもしっかりと分析した上での建築的な提案があればさらにリアリティのある主張になったのではないかと感じました。</p>					

奨励賞 東北専門 新聞連盟賞	31	ルアンタイにちなむ コワーケーションから 広がる縁	仙台高等専門学校 建築デザイン学科	遠藤 天夢	5
<p>都市部だけでなく郊外や過疎地を含めた多様な地域における居住と仕事の新たな関係を想定したコ・ワーキングスペースについての課題です。</p> <p>仙台市郊外の梅田川に隣接する緑溢れる自然豊かな土地に、「Coworking」と「Vacation」を組み合わせた「Coworkation」の仕組みを取り入れた宿泊機能を備えた建物を計画する提案です。</p> <p>タイの建築手法を空間構成に取り入れ、水辺の環境とつながりをもたせた気持ちの良い内外部空間の作り方が魅力的でした。利用者のコミュニケーションが図れるパブリックゾーンとゆったり滞在できるプライベートゾーンの区切り方も評価が高かったです。</p> <p>一方で、「Coworkation」の提案に対する敷地の吟味や隣接する河川についての調査・分析が提案に落とし込まれているとさらに良かったと感じました。</p>					
特別賞	32	玲瓏の常夜灯	東北大学 工学部 建築・社会環境工学科	川端 知佳	4
<p>タイのバンコクに地域住民のみならず観光客をターゲットとして、都市をアピールできるシンボルとなる美術館を計画する課題です。</p> <p>提案は、バンコクで夜の雰囲気印象的なナイトマーケットなどに合わせ、仕事帰りのビジネスマンや観光客の一日の締めくくりにゆったりとした時間を過ごせる「夜の美術館」です。</p> <p>各展示を1つ1つのシーンと捉え、展示や動線計画にストーリー性をもたせて全体計画をしている点が優れていました。プレゼンテーションのストーリー性も評価が高かったです。</p> <p>一方、魅力的な計画であるだけに夜の展示に限定するだけでなく、日中にも魅力的な利用ができる提案が組み込まれていればさらに様々な人々が利用できる地域のシンボル施設になったのではないかと感じました。</p>					

第24回 JIA 東北建築学生賞 全体講評

◎審査員長 前原 尚貴 (JIA 福島)



コロナ禍での開催となり、今までとは一変したオンラインによるリモートでの開催という、前代未聞の審査会となりました。それにもかかわらず、たくさんの応募を頂き、本当にありがとうございました。

このような状況下で今後は、ますます建築や都市、人と人との関係をどのようにつないでいくか、また生活や暮らしそのものを、考え直さなければならなくなるかもしれません。

これらのテーマに対して、課題主旨にしている学校も多く見られました。僕たち建築家にも地球環境と共に、一緒に考えて行かなければならない必須の課題となっています。

そんな中、今回学生達の夢や希望に満ちた提案を拝見し、明るい未来が少し垣間見えるような審査会でした。

提案作品の評価は、各学校から出された課題主旨に対して、深く考え、リサーチし、かみ砕き、既成概念にとらわれずに、自分の提案としてまとめられているか。そこに建築の夢や希望、どれだけ思いが込められているかに、かかっていると思います。

もちろん、プレゼンテーションの上手さやビジュアルも大切ですが、熟考された内容には、「提案の強さ」と「分かり易さ」があります。

これらの、学生達が考えた小さな気づきや事柄に聞き耳を立て、ひとつでも多く拾い上げ、評価したいと思いました。

今回受賞された作品もそうでなかった作品も、唯一無二のものです。苦労して考え抜いたプロセスや時間。そしてこの審査会も一生の宝物となることでしょう。

「建築」という文字には、建てる築き上げという意味があります。

人生の建てる主となり自信をもって、これからも夢を築き上げて行って欲しいと思います。

◎審査員 亀田 進之助 (JIA 青森)



今年はオンライン化する社会において建築がどのような役割を果たせるのかが問題意識となっている印象を受けました。今回評価が高かった作品に共通するのは建築の造形や空間性の強さでした。木材工場と商業施設の複合施設「渾然一体」や人と自然をつなげる未来の学校「Connection」など高評価を得た作品に共通するのは実体験に基づく空間や造形のシンボル性です。どれも未来における建築の可能性を感じさせる提案になっています。

一方で社会問題の解決に向けてリサーチを丁寧に行った作品も根強い評価を得られました。エリアに点在する空き家群をリノベして地域一帯の再生を図る提案「まちの縁台に腰かけて」をはじめ、利用率の低い駐車場や集合住宅をクリエイティブな環境へとリノベする提案「集合住宅革命」など、地域の課題の解決に向けて正面から攻める姿勢が評価されました。

それ以外の作品もレベルは十分高いと感じました。美術館の提案「アートを日常に日常をアートに」をはじめ、キャンパス内の交流施設「開閉がもたらすにぎわい」、都市の立体農園「緑の箱庭」、箱を組み合わせた環境の提案「箱と町」など、空間や環境がしっかり表現されイメージパースのレベルも高く驚きました。

今後は地域の再生において、ますます建築の力やシンボル性が不可欠になると思います。また、建築を通しての実体験が希少価値を持つ時代になるはずで、だからこそ、コロナが落ち着いたら、世界遺産や有名建築など国内外の名所に足を運び、リアルな場所や空間を体験してください。人々を惹きつける魅力ある建築、行ってみたくなる施設とはどういうものなのかを五感で感じ取れると思います。そして、課題に素直に答えるだけでなく、自ら問題意識を見つけて提案に盛り込む姿勢を忘れないでください。

◎審査員 加藤 一成 (JIA 秋田)



今年の東北建築学生賞では、前年に引き続き 4 回目の審査員を担当させていただきました。今回はコロナ禍での開催という事もあり、ZOOM を活用したオンラインでの発表となりました。多少意思の疎通がし難い場面もありましたが、特に大きな不都合もなく JIA 東北支部と学生の周到な準備の賜物だと感じました。

さて、本年度の最優秀賞は、空き家と公園、2 つのストックの潜在力を引き出し都市の余剰空間をいかに利用していくかという課題に対し、新型コロナウイルスの流行と関連付けながら「まちの縁台」として再生された空き家による地域コミュニティの復活という提案でした。今日的な視点が散りばめられ、そこに示された発想や具体的な建築の姿は最優秀賞に相応しいものだったと思います。また、優秀賞 2 つも最優秀賞に遜色のない素晴らしい作品でした。魅力ある建築の姿が、発想の過程や形態・空間構成と共に必然と説得力を持って表現されていました。

今やデジタルによるプレゼンの表現は当たり前になり、逆にデジタルを感じさせないグラフィック表現が主流になっているように思いました。ただ、表現の追求には限度があり、それだけを追求しても意味はありません。独創性のある着目・発想と、それを的確に表現する手法が求められます。

最後に、自らの意志で東北建築学生賞に応募しようと決意した諸君に、深く敬意を表します。自信を持って臨んだ人も、そうでない人も、自らの意思でコンクールに挑戦するというその姿勢は賞賛に値します。将来、我々と同じ、「建築家」というフィールドで共に活躍されることを大いに期待しております。

◎審査員 佐々木 則章 (JIA 岩手)



参加された学生のみなさん、大変ご苦労様でした。コロナ禍での開催となった今回の東北建築学生賞は、学生の皆さんはリモートでの参加となりました。会場の雰囲気伝わらない中、個室から一人でリモートによる発表を行うのは非常に難しい状況だったと察します。いつも通りのパフォーマンスが発揮

出来なかったと感じている方も多いと思います。我々審査員もそのもどかしさを感じながら聞いていました。これもひとつの経験になったと考えて次の機会へ生かしてください。今回応募された作品は、独創性が感じられる作品が多く、自分の主張したいこと、示したい事が伝わってくる作品が多かったと思います。コンセプトの決定、それを具体化するための調査、スタディ等がしっかり行われている印象を強く受けました。プレゼンテーションにおいては、パース、模型、スケッチ、写真、ダイアグラム等細部にわたって作り込まれ、手書きとPCを併用した手法も好感がもてました。そういう意味において完成度が高い作品が多かったと思います。今後もう少し検討してほしいと思った点は、パネル内のレイアウトです。同じ内容でもレイアウトによって、作品の理解度と印象が大きく変わります。用意した材料をはめ込むだけでなく、もう少しプレゼンテーションの流れや、サイズ感を検討した上でレイアウトしていただければ、さらに完成度が上がると思います。得票数のばらつき具合を見てもわかる通り、どの作品にも良さがあり、その差は大きくありませんでした。思うような評価が得られなかった方も審査の結果は気にしすぎず、各学校の代表として参加したことに自信を持ってこれからも建築を続けてください。

◎審査員 齊藤 彰 (JIA 宮城)



建築とは、ある依頼という媒体を通して、ある時点の社会の要請によってある敷地・環境につくられるものだと考えています。その観点から第一には、現在～将来の社会の課題に対して、その建築が利用され得る期間を通じて的確であり続け得る解答を導き出せるように努める必要があります。これを皆さんの取り組んだ課題に置き換えてみると、「与えられた課題（依頼）の中からいかに自分でテーマ（社会の要請や課題）を見つけ出し、それに対する自分なりの主張（解答）をできているか」ということになるでしょう。優秀作品は何れも、この点において興味深いものでした。

第二には、設定した／された敷地に対して、その敷地・環境が持つ性格や置かれている状況を正確に把握し、そこに建つ建築や空間、そこを利用する人と周辺環境にどのような応答が生じるか／生じないかについてイメージすることが求められます。そのためには敷地の中あるいは建築単体だけで考えているのでは不十分です。プレゼンテーションに周辺環境の把握できる配置図がない作品も散見されましたが、少なくとも自分が計画する範囲とその外側の関係、境界の在り方には意識的であって欲しいし、都合の良い敷地の改変などはせず敷地のあるがままの姿を読み込んで考えてみて欲しい。

最後に、「日頃から様々な社会の課題に意識的であり常に学び続け、更には自分なりに今後の社会がどう在ってほしいか、考えてみる習慣をつけること」そして「都市計画的に定められた用途地域といった枠組みにとどまらない、都市・環境が自ずと求めている姿を観察者として聞き分ける訓練をしてみること」この二点のアドバイスを講評に代えさせていただきます。

◎審査員 布施 剛臣（JIA 山形）



今回はコロナ禍の中、これまでとは違った新しい方式による学生賞の発表・審査となりました。始まる前はオンラインによる発表・審査に不安もありましたが、いざ始めるとこの状況下でも建築を通して次の未来の社会をつくっていかうという学生のエネルギー溢れる提案・作品の数々に感動を覚えながら審査をさせていただきました。

質の高い提案が数多くあったため審査が難しく票が割れましたが、その中で各賞に残った作品は提案の魅力が短時間で審査員に伝わる明確な問題提起・コンセプト力と表現力が他よりも優れていたと感じました。

オンラインプレゼン・質疑という初の試みで発表者は難しさを感じたと思いますが、2分のプレゼンでは提案書のコンセプト・デザインを短い時間の中で自分の言葉で秩序立てて伝える説得力が評価を分けたと感じました。3分の審査員質疑では表層の提案なのか、考え抜いた分析から導き出された提案なのかが、回答によってよくわかりました。受賞された提案者は、魅力ある表現力と言葉の説得力があり、将来の可能性を期待させる方々だったと思います。

最後に、大学間の交流が難しい状況下で、この企画は学生にとって建築に対する考え方やデザインを学校の枠を超えて高め合える鍛錬の場として非常に素晴らしいものだと感じました。将来の建築業界を担って行く学生の皆さんには、今後もこのような場を活用しながら設計活動に励んでもらえることを望んでいます。

◎審査員 ビジネスセンター／工藤 昌彦（JIA 東北支部協力会）



今回、審査員をさせていただきました。この度の学生賞のエントリー作品は、皆様とても素晴らしい作品でございました。

応募された学生様の作品それぞれが、課題を理解、分析の上、個人の想像力、独創性をいかに発揮された作品だったと思います。

また、プレゼンテーションに至っては、各学生それぞれが、作品に対する自分の思いが、大いに伝わってきたプレゼンテーションでございました。

このコロナ禍の状況でなければ、遠隔プレゼンではなく、身近で作品に対する皆様の思いを直接聞きたかったものです。

これからも、学生の皆様には素晴らしい作品をどんどん作り続けていただけることを期待したいと思います。

この度は学生の皆様、お疲れ様でございました。

◎審査員 鈴木 基行((一財)みやぎ建設総合センター理事、東北大学名誉教授)



この学生賞の課題は共通ではなく学校ごとに個々に提示され、学生はその課題から主旨を読み取り設計に反映させるものである。このため、作品の相互比較ができなかった点が審査の難しかった点である。また、作品も建築物を取り扱うもの、アートのなもの、さらに地域活性化案の提案など多岐にわたった点も審査の難しかった点である。さらに、

今年は新型コロナウイルスの影響で審査もオンラインで行われ、会場で学生たちに直接質問する機会がなく、各2分のプレゼン、3分の質疑応答のみであった。しかも1回の投票(例年2回投票)で賞を選定するという方式になったため、評価がばらけていた様に思える。

審査基準としてコンセプトの導き方、社会性・歴史性、空間性・造形力および表現力の4つが提示されていたが、特に社会性、表現力、実現可能性に重点を置き審査した。

印象に残った作品としては、「Connection—人や自然を繋げる学校—」(優秀賞)と「渾然一体—重なる歴史と路—」(優秀賞)および「集合住宅革命」(みやぎ建設総合センター賞)であった。最初の作品は未来の学校のデザイン、2番目の作品は山形駅西口の開発、3番目の作品は山形市内の日常をデザインするものであった。

各賞を受賞された作品はいずれも個性的で各課題に果敢に取り組んでおり、アイデアの表現の仕方に工夫が見られた。受賞された学生の皆様の今後のご活躍を大いに期待しております。

◎審査員 川村 巖(東北専門新聞連盟理事長、日刊建設産業新聞社取締役東北支社長)



第24回JIA東北建築学生賞の審査にあたり、いつも感じるのは審査の難しさにある。

学校から与えられたテーマは各学校とも違うことから審査基準はあるものの、審査員の知見が違っており、当然のことながら共通の評価をもつことは至難となる。従って審査員個々の視点が評価

を大きく左右する。結果は評価がバラバラで、分散することとなるが致し方ない。

案の定、最優秀作品は10人の審査員のほぼ半数の推薦で決まった。優秀賞以下は半数にも満たず奨励賞に至っては、三分の一程度の推薦で入賞するという現実がある。もう少し審査に議論もほしい。

しかしながら、応募作品は力作ぞろいで楽しみな審査であった。自分としては、独創力、造形力に力点をおいて審査したことから本賞に該当しなかったが、協力会の特別賞に輝き心持が安堵したことを覚えている。最後まで最優秀を争った優秀賞を推薦していたが、甲乙つけ難いなか、最後の一票を投じたことが最優秀に決まり、複雑な思いに駆られた。

建築家の視点と一般人の評価の違いをまざまざ感じた審査でもあったが、若い学生の冒険心をもっと評価してもいいのではないだろうかとも思う。これを機会に応募した32作品に携わった学生諸君が建築家の道を志し、数年後にはJIAの若手として活躍することを願っている。

◎審査員 大沼 正寛 ((一社)日本建築学会東北支部)

東北工業大学 ライフデザイン学部 生活デザイン学科 教授)



本賞の難しさは、大学・学科によって設計教育方針や学年・課題内容が異なることを超えて、評価をしなくてはならないという点にある。そう思って臨んだが、提案を熟読し発表を聴くと、この時代、この地方ゆえに通底している社会的課題を鋭敏に感じ取って空間提案を練り上げている、ある種の共通性が感じられた。その意味で、地域の現場に立脚し、発見した課題から、創出された空間提案までの道のりを濃密に検討し、その意義や効果をよく示していたものが、一步抜きん出たと考えられる。

最優秀賞に輝いた「まちの縁台に腰かけて」はその好例で、空き家の減築・利活用を運させながらランドスケープを再構築していく連鎖のデザインが特徴である。これに対し、優秀賞となった「Connection」は小中学校の施設計画、「渾然一体」は商業空間併設型の木材工場と、より建築提案の性質がよいが、それぞれ自然環境との呼応や歴史性の継承への着眼がみられ、領域横断的な面を有している。編集力、表現の巧みさも申し分ない。その一方で、作品群の全体を通してみると、建築そのものの造形や自然要素との共存については、検討が必ずしも十分でないものもあった。優しくしなやかに建築が変容しなくてはならない時代かもしれないが、むしろ人間社会がめまぐるしく変わるからこそ、長く在り続ける建築の価値があるともいえる。

そのような建築の意味を再考する有意義な時間を与えて頂いたことに、心から感謝したい。

◎特別賞審査員長 十川 翔 ((公社)日本建築家協会東北支部協力会)

元旦ビューティ工業(株)



特別賞(協力会特別賞)には3つの審査基準がございます。

- 1 具現化してみたい独創性が強く伝わる作品
- 2 製品コンセプトにヒントやインパクトを感受させる作品
- 3 技術開発に於いてチャレンジ精神を奮い立たせるような作品。

特別賞を受賞いたしました作品は特に、3つのコンセプトを満たしておりました。

夜に限定して開放する美術館や、空中公園のよう空間を作り出す建物、人とのつながりを創出するセミナーハウス。

どの作品も私の凝り固まった頭を柔らかくしていただきました。

受賞された皆様方が社会へ出て仕事をするさいに、一緒に仕事ができればとても幸せに感じます。